

---

# 剣の道 第2部 最後の真善流

天道総語

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

剣の道 第2部 最後の真善流

### 【Nコード】

N5158F

### 【作者名】

天道総語

### 【あらすじ】

かつて最強とうたわれた真善流。その最後の後継者であり、新撰組の一員として、一人の男として激動の時代を生きる一人の青年の物語。主人公、滝川真龍は強いものを求め、江戸へ。そこでであった沖田と市ヶ谷の試衛館で対決する。やがて試衛館に通うようになった真龍は試衛館一派とともに京へ行く。

## 第1章 血を受け継ぐもの（前書き）

この作品は以前自分のブログ上で書いた。「剣の道 真善流放浪記」の続編です。

機会があればこちらでも公開していこうと思います。

## 第1章 血を受け継ぐもの

### 第1章 血を受け継ぐもの

時は1864年 黒船の来航により、閉ざされた国が新しい時代へ移り変わろうという混乱の時代。

そんな時代を己の剣を信じ、激動の時を生きる一人の青年の物語。

「我は新撰組隊士、滝川真龍。全力を持ってお相手致そう。」

水色の羽織を着た男が複数人に囲まれながらも、そう叫んだ。

囲んだ男達はそれを聞きき、一斉に腰を引き、中には逃げ出すものもいた。

「さあ、どうする!」

「こちらは数で勝っているのだ、臆することはない、皆の者、抜け!」

その一言に、みな刀を抜いた。

「ほう・・・やるのか？」

滝川真龍と名乗る男は自信ありげにそういいながら、刀の鍔元に手をかけた。

敵に囲まれたこのような状況では一番の使い手に切りかかるか、正面突破を試みるというのがよくみる光景だが、この男は違った。囲んだ男たちを睨みつける。その眼力に男達の動きが止まる。

そのわずかな一瞬だった、鋭い一刀が放たれ、一人の男の手が飛び、次の一瞬には他の男が倒れる。そのような光景がわずかな時間の間に繰り返された。

「数だけでは、私を切ることはできない。残念だったな。」

あたりは血の海となり、男達が倒れていた。くさい芝居小屋の芝居を見ているようだった。

そつと刀を納めると・・・。

「真龍さん大丈夫ですか？」

子供のような声が聞こえ、真龍と同じ羽織を着た男達が駆け寄ってきた。

「問題ない、この程度の輩、何人いようと私に傷すらつけられま

せんよ。」

「さずが真龍さん！ぼくならどうだったかなあ？」

「何を笑わせるようなことを。新撰組で1、2を争うような腕を持つ人が言ってるんですか！」

「やっぱり真龍さんにはかなわないや」

真龍と話している男は、沖田総司。

新撰組の1番隊の組長で、真龍とは新撰組結成前からの付き合いになる。

真龍と沖田の出会いはおおよそ3年前の江戸でのことである。

「江戸の剣術もこんなものか。」

その時真龍は群衆の中心にいた。  
ある道場の高弟を人々の前で、見事打ち負かしたのである。

江戸の剣術といえど、我が剣の敵ではないということか、残念だ。

「わー、わー、すごい！すごい！」

群衆の中から声が聞こえ、一人の少年のような男が真龍に歩みよった。

「ガキか、さがれ！お前などに用はない！」  
「すごいなあ。江戸でもなかなか見られないよ。いや、本当に強いなあ。」

真龍はこの少年のような男を相手にしなかった。

なんだこのガキは。うつとしい。

それより江戸の剣はこんなものではないはず、俺を超えるものがないはずだ。

「他に俺とやるものはおらんか！それとも江戸は腰ぬけばかりか！」

群衆がざわめくが、名乗り出るものはいなかった。  
すると……。

「僕が相手になりましょうか？」

先ほどの男が笑顔を浮かべながら言った。

「お前が？江戸はこんなガキでもまがり通るようなものか！冗談言うな！」

「あー見た目で判断しないで下さいよ。これでも市ヶ谷の試衛館というところで剣術を習っているんですよ。ぼく沖田総司って言ってます。よろしくお願いします。」

「ふん、笑わせるな。お前のような奴を相手にしている暇はない、どけ！」

真龍はそう言って、沖田の体を突き飛ばし、街の中へ消えていった。

日も落ち、夜も更けた頃、真龍は川原で体を休めていた。

「ん？」

草影から数人の人の気配を感じ、真龍は横になったまま刀に手をかけた。

闇討ちか、昼間の雑魚だろうな。

真龍の読みは当たっていた。昼間一件の報復として門下生の精鋭を集め、寝込みを襲いにきたのであった。

真龍は体を起こし、周りを見渡した。

こうでもしないと勝てないとみたようだ。雑魚は雑魚の考えしかで  
きんのだな。これが江戸か、期待はずれもいいとこだな。

十数人といったところか、どいつも腑抜けた顔をしてやがるぜ。

「さあ、どこからでもいいぞ、かかってきな。」

真龍が自身に充ち溢れていたのは、昼間の戦いで圧勝したことだけ  
ではない。

彼は真剣の勝負に最も自信があるのである。

刀を抜くと同時に真龍の目つきが変わった、そして……。



流れるような剣に腕が飛び、隣の男は首、その隣の男は腹、次は足と次々に切って行った。

やがて真龍の前には昼間に倒された男が残り、男は慌てるように構えを上段にとった。

「ほう、上段か、昼間の戦いではなかった構えだ。では、とくと見せてもらおうか。」

真龍の自信あふれる鋭い眼光に男は動けずにいた。

「どうした？みせてくれよ。あんたの剣を。」

男は動揺しながらも、一步踏み出し、思い切った一刀を真龍の脳天めがけて振り下ろした。

「そんなものか。」

男の一刀は空を切った。

「遊びは終わりだな。最後は……。」

真龍は男の手元を突き、次の一瞬に心臓へ刀を差しこんだ。刀は男の体を貫き、血が噴き出した。

「けつ、俺の寢床が汚れちゃったぜ。」

刀の血を拭き、静かに刀を納めると、人影が近づいてきた。

ん？役人か？見つかるとやっかいだな。

その人影は役人ではなく、薬売りのような装いの男だった。その男は真龍に何も語ることなくその場を立ち去っていった。

あくる日

江戸の剣とはこんなものではないはず、やはり千葉や斎藤といった有名所に行くべきかもしれん。

しかし、それだけのところならば易々とはいかないだろうな……。

……そういえば昨日のガキが市ヶ谷の道場にと何かかいていたな。

もしかしたらつながりがあるかもしれん、行ってみるか。

「あーやつぱり来てくれたんですね。さあ中へ。」

なんだこのガキは昨日のことといい、うつつしいヤツだ。

沖田は真龍を強引に道場の中に入れると、そこには昨晚、真龍の前を通りすぎた男が立っていた。

「土方さん、近藤さんは？」

「……奥にいると思うが……。」

「そうですか、ちょっと待っててくださいね。」

沖田は真龍にそう言い残し、道場の奥へとかけていった。

・・・あの男・・・

真龍にと男の間に何とも言い難い空気が流れ、沈黙が続く。  
二人は何をするわけでもなく、ただお互いの目を見ていた。

「近藤さん、はやく！はやく！」

「この人ですよ。昨日話したすごい人。」

「ほう、こちらが・・・、総司から聞きましたぞ！ずいぶん腕の持ち主だと。してお名前は？」

真龍は近藤を不機嫌そうに睨みつけた。  
すると、沈黙を守っていた男が口をひらいた。

「近藤さん、どうやらご不満のようだ。こちらから挨拶したほうがよさそうだ。・・・。」

「おお、そうだなトシ。これは失礼した。まずこちらから名乗るのが筋でしたね。」

私は当道場、試衛館の主、天然理心流の近藤勇と申す。  
して、お主を連れてきたのが、沖田総司、でこちっちが土方歳三。」

「私は滝川真龍。一同なにか勘違いをしているようだが、私はここへ遊びに来たわけではない。」

三人は顔を見合わせ、すこし笑みを浮かべた。

「もちろんですよ、はやくやりましょうよ。」

沖田は嬉しそうに言った。

「総司はなかなか強いぞ、うちで一番かもな。」

近藤は余裕の顔で高らかに笑った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

土方は置物のように、あれから口をひらくことはなかった。

「木刀でいいですね。道場で血を流すわけにはいきませんから。」

本当にやる気なのか？つくづく鬱陶しいやつだ。

沖田は真龍に木刀を手渡した。すると・・・。

「おっ、お客人か？珍しいな。」

「もう、永倉さん！これからいいとこなんですから黙ってみててくださいよ。」

「こりゃすまんな。」

一人また一人と道場に人が集まってくる。その中で真龍と沖田の一

線が始まるうとしていた。

何なんだこの道場は。次から次へと野次馬のようにわいてきやがる。

しかし、なんだこの男の落ち着きは？

周りの奴らも誰ひとりとして物怖じしていない。  
それほどこのガキのような男が強いのか？

「さあ、はじめましょうか。」

沖田は笑みを浮かべながら構えた。

とにかくまずは様子見だ。その自信、どんなものかみせてもらおう。

互いに見合い、そして・・・

沖田の剣が素早く、そして艶やかに、左右、正面と打ち込まれていく。

それを真龍は見切るようにかわしていく。

「さすがですな。・・・これならどうです？」

すると、沖田はすつと刀を下げ、真龍の懐めがけて突っ込んできた。

速い！二連の突きか！ならば打ち終わりに隙が生まれるはず・・・。

しかし、沖田の突きは二連ではなく三連だった。

予想の外れた真龍は対処しきれず、胸元を突かれその場に倒れこんだ。

三連？いや、四連か？とにかく速い！これは1度や2度ではかわしきれんぞ。

これは受けて機を待つよりも、先に出るのがよさそうだ。

「やるな、お前を見縊っていたようだ、ここからは本気でいかせてもらおう。」

先ほどとは逆に、真龍が前に出て攻め込む、沖田はそれを真龍と同じ様に受けかわした。

「すごいなあ。僕の速さについてこられるなんて、でも負けませんよ。」

沖田が攻めれば真龍がかわし、真龍が攻めれば沖田がかわす。まさに一進一退の攻防が延々と続いた。

・・・はあ、はあ、はあ、はあ・・・。

互いに息が切れ、動きも鈍くなってきた。

「近藤さん、そろそろ止めてやったほうがいい。二人とも疲労困憊で倒れてしまうぞ。」

「そうだな、二人ともそれまで。」

しかし、二人は戦いをやめなかった。二人は周りのことを忘れ、戦いに集中していた。

「おい！だれか止めてやれ！」

近藤の声に二人の男が沖田と真龍を止めに入った。

「そこまでにしておけ、これはあくまで手合せの勝負だ、ならばいつでもできるだろ総司！」

「はあ、はあもういいところだったのに、はあはあ。」

真龍も冷静になり、周りを見渡すと群衆の数が増えていた。そこには後に新撰組の中核となる、藤堂平助、永倉新八、原田左之助、井上源三郎、山南敬助がいた。

すると、近藤が真龍に歩み寄り、  
「見ての通り小さな道場だ。門下生も数えるくらいしかおらん。ここに集まるものはお主のように客人として来て、やがて仲間になったものばかりだ。気に行っていたただけならまた足を運んでくれ。」

強い！ガキと思って侮っていた。これだけの速さを見たのは初めてかもしれない。  
しかしまったく不思議な道場だ。どういつも自信をもった顔をしてやる。そんなに腕の立つ者ばかりなのか？  
これが江戸の剣か。だとすれば、おもしろい。わざわざ来たかいがあったものだ。

そして真龍はこの試衛館に通うことになっていった。

真龍が試衛館に通うようになって数か月がたったある日のこと

「滝川くん、ちょっとよろしいかな？」

「近藤さん、私に何か？」

「うん？ ちょっと話たいことがあってな。」

真龍は試衛館の剣豪に触れあううちに仲間になりつつあった。近藤の誘いを不思議に思いつつ、真龍は近藤についていった。するとそこには土方と山南がいた。

「まあ、座ってくれ。」

「滝川くん、君はどこで剣を習った？」

「父からですが、それが何か？」

「もしや君の父上殿は滝川真兵衛殿ではござらんか？」

「なぜ、そんなことを？」

その質問に山南が答えた。

「以前君と同じような剣を見たことがあってね。もしかしたらずってね。突然こんなことを聞いて悪いね。」

「確かに私の父は滝川真兵衛ですが……。」



滝川真兵衛、かつて最強と謳われた流派、真善流の使い手であり、真龍の父親である。

「真善流は一子相伝の流派と聞く、とすれば君も真善流の使い手ということなのかい？」

「ええ、まだまだ父には及びませんが……。」

そして近藤がこの話の本題を切り出した。

「実は近々家茂公が上洛される。最近は幕府を潰そうという輩が多くてな、そこで腕の立つ者を集め浪士組を結成し、警護にあたろうという話があつてな。」

次に山南が話す。

「我々はこれに参加しようと思っている。すでに永倉君たちにも話彼らも一緒に来てくれるそうだ。」

そして、君にも参加してもらいたくてね。

その前に君のことをはつきりさせておこうと思つてね。変なことを聞いたわけなんだよ。」

「そうでしたか、しかし……。」

「君は強いものを求めこの江戸にきたと言つていたね。今強いものが集まるのは江戸ではなく京だ。君の目的も果たせると思うのだがね。」

たしかに俺は強いものを求め江戸にきた。話が本当ならば、いつ  
てみる価値があるかもしれない。

「わかりました。私でよければお供しましょう。」

「おお！そうか！君腕なら申し分ない、まして真善流の使い手ならばなおさらだ。ともに行こう！」

こうして真龍は試衛館一派として京へ行き、やがて新撰組の一員  
となることとなる。

## 第1章 血を受け継ぐもの 完

この作品はフィクションであり、歴史上人物および団体は一切関係  
ありません。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5158f/>

---

剣の道 第2部 最後の真善流

2010年10月10日18時43分発行